

夜間中学に学ぶ在日朝鮮人女性

— 作文とライフヒストリーにみるポスト植民地問題 —

山 根 実 紀

本論文の課題は、植民地時代に学齢期を過ごした在日朝鮮人女性の不就学・非識字を規定した諸要因を明らかにし、それが、解放後の生活をどのように左右したのか、つまりポスト植民地主義的状况を、民族・階級・ジェンダーの重層的差別との相互関係から考察することにある。本論文の対象とするのは、あらゆる初等教育機関からの疎外、および日本語と朝鮮語の習得機会からも疎外され、高齢になって夜間中学で学ぶ在日朝鮮人女性であり、単に政策や統計などを分析するだけでなく、彼女たちの具体的な経験に基づいて考察した。なお、夜間中学が義務教育未修了者を対象としているのと同時に、識字教育的な側面もあることから、本論文では就学・識字を並べて論じることにはしたい。また、在日朝鮮人女性にとって、本来識字とは、日本語だけでなく朝鮮語の識字をも含んでいるが、夜間中学では日本語学習が前提となっている。従って現在に至って、何故日本語の学習をしているのか、ポスト植民地主義批判の観点から、日本語の識字の意義についての問いが常に発せられなければならない。こうした問いを念頭に置き、本論文の課題をすすめた。

本論文の構成は、第1章では、夜間中学と在日朝鮮人、植民地主義とジェンダーの相互関係などの先行研究を検討しつつ、本研究の視点や立場、また研究方法を示した。近年、夜間中学に関する研究は、在日朝鮮人に関心を寄せつつある。さまざまな視角からの論考が現出しているが、何故彼女たちが学ばなくてはならないのか、何故日本語を学んでいるのか、といった問題意識については希薄と言わねばならない。識字の価値も含めた重要な課題であることを示した。一方、在日朝鮮人教育に関しては、不就学について注目すべき論考はあるものの、ジェンダー的視点に重点を置いたものは皆無である。そこで、植民地主義とジェンダーの相互関係の観点で、在日朝鮮人女性の問題を考察する必要がある。「継続的本源的蓄積」に加えて、ポスト植民地主義、冷戦体制構造、ジェンダーなど、在日朝鮮人女性の錯綜した状況を、複合的な視点でもって、個別具体的に組み込む必要性を示した。

研究方法としては、京都で唯一の夜間中学であり、生徒の約7割が在日朝鮮人女性である京都市立洛友（旧郁文）中学二部学級（以下、洛友中）において、筆者は2006年9月から2007年12月まで、学習補助ボランティアとして通い、フィールドワーク調査を重ねた。洛友中の過去28年分の作文集から、総計1824作品のうち本名（民族名）による838作品を抽出し、キーワード検索と、その中のさらに「個人史」的要素を含む156作品の具体的な内容の分析を行った。併せて夜間中学生のライフヒストリーの聞き取り調査も行った。

第2章では、在日朝鮮人の教育機会のジェンダー化過程など歴史的背景と社会経済的な概況について考察した。植民地時代の初期は、日本の教育政策も民族教育運動も在日朝鮮人男性労働者を対象にしていた。また、日本の義務教育も形式的に適用されたに過ぎず、実際には日本人を優遇し、民族による序列化を図っていた。植民地時代の後期は、協和事業による皇民化政策を、全在日朝鮮人に強要し、民族教育運動も激しく弾圧された。しかし、同化教育であった上に、戦時動員として勤労奉仕などのためまともな勉強もしていない。一方で、それでも学校に行けなかった在日朝鮮人女性が多く存在した。解放直後は、帰国を前提として、民族教育運動が広範囲に展開されるが、激しい弾圧のため、朝鮮人の主体

的な民族教育は常に不安定な位置にあった。また、生活苦によって、教育から疎遠になるものが圧倒的であり、それが、家事に従事していた女性が負担を担わされた。1950年代半ばから1960年代の帰国運動と連動した民族教育高揚期に、在日朝鮮人社会で識字問題に関心が寄せられ、青年や女性を対象に成人教育が盛んに行われるが、民族分断の現実、そして仕事と家事に追われていた主婦には、あまり根付かなかった。1970年代からは、帰国事業の終了と、日韓条約を契機とした同化政策、夜間中学の増設運動の成果、在日朝鮮人女性の高齢化が後押しして、日本語の識字への関心が高まった。この頃から夜間中学や識字教室に、在日朝鮮人女性の姿が見られるようになり、日本社会における在日朝鮮人女性の日本語の識字問題が顕在化することになる。

第3章では、まずキーワード検索からみた在日朝鮮人女性像を示した。学校以外の単語で頻出度の高い語彙を、「生活領域」と「民族領域」にグループ化して考察した。生活領域においては、男性との力関係や、在日朝鮮人女性が母として、主婦として、稼ぎ手として責任を負っていることが浮き彫りになった。それだけでは十分に彼女たちを理解することができず、さらに民族によって規定された錯綜状況が明らかになった。

次に、重層的差別構造下に置かれている彼女たちを個別具体的にみていくために、夜間中学に通う在日朝鮮人女性生徒の作文とライフヒストリーに基づき、不就学・非識字過程とその影響を考察した。作文の内容分析においては、学校という日常生活とは切り離された空間で、かつ教師と生徒という権力関係の下で書かれた作文にも関わらず、作文全体のなかで「生活体験」要素を含んだ作文が32%存在していたのは、大きな発見であった。夜間中学への入学が、彼女たちの「生活体験」抜きにして説明がつかないことを意味している。それらの「生活体験」要素を含む作文を取り上げ、ライフヒストリーとも照合しながら、①植民地時代～不就学体験、②解放直後～帰国と民族教育、③夜間中学入学前史～結婚、子育て、仕事、④夜間中学との出会い～彼女たちの主体性、という4つに時期区分して、より詳細に検討してきた。日本語の読み書きが出来ないことは、その後の日常生活上の不便を強いられ、また朝鮮語の会話、読み書きができないことは、あまりにも屈辱的なことであるはずだ。植民地支配の暴力性は、解放後もとりわけ在日朝鮮人女性が生活に大きな影響を及ぼし、継続していることを示した。また、これまでジェンダーの視点が欠落していたために、不就学を圧倒的に押し付けられていた在日朝鮮人女性は不可視化されていたが、民族・階級・ジェンダーによる諸要因の相互関係を考察することによって、可視化することができた。

第4章は、結論と今後の課題について提示した。植民地時代に規定された不就学・非識字の諸要因は、まず民族的要因としては、在日朝鮮人に対する義務教育制度の適用がタテマエであったことから、朝鮮人児童の入学は拒否されるなど、日本人との序列化が図られていたこと。階級的要因としては、日本社会の底辺に追いやられ、生活苦に置かれていたために子どもでも働かなくてはならず学校どころではなかったこと。ジェンダー的要因としては、日本社会と在日社会の双方のジェンダー規範によって教育機会が妨げられた。

これら3つの諸要因は、独立して語られるのではなく、それぞれが折り重なっている。要するに、植民地時代の在日朝鮮人女性の教育実態は、「常態的不就学」であった。ただし、その時期の日本学校就学が自ずと同化教育を意味することを考えると、就学・不就学は「“包摂”の暴力と“排除”の暴力」と定義することが出来る。しかし、ここで規定付けられた不就学・非識字は、在日朝鮮人女性たちの生活に大きな影響を及ぼしたということでは、重要な問題であった。解放後の最初の頃は、在日朝鮮人社会において、自民族の言葉・文字の奪回に奮闘していた。しかし、民族教育への弾圧や、経済的困難から家事や家計を支えるもの、特に女性はその機会に恵まれなかった。そして、帰国運動の終了、日韓条約、夜間中学の増設運動の成果、在日朝鮮人女性の高齢化など、さまざまな要因が絡んで、在日朝鮮人女性の日本語の識字問題が顕在化した。日本語の識字への関心は、生活面での困難の解消という側面で

説明できるし、夜間中学への関心は、家事や子育て、仕事から解放されて、経験できなかった学校で新しい経験を積む、という意味で主体性の構築の場であったということもできる。さらに、日本語の識字や学校教育によって、序列化を図る社会からの解放を求めて夜間中学に入学するものもある。しかしながら、母語の朝鮮語よりも、日本語に関心を寄せざるを得ない現状に向き合わなければならない。これこそがポスト植民地主義的状况であると結論づけた。

最後に、方法論上の課題と残された課題を提示した。夜間中学を対象としているために、日本語の識字に偏向し、また夜間中学に通えないものを欠落しているので、今後は対象を広げて考察する必要がある。作文分析では、今回は本名の作品を対象としたので、今後は抽出方法の再検討と、識字的な視点や表現方法に注目して多角的に分析する方法を再検討したい。また、就学・識字の意義の再検討を行う必要がある。それぞれの置かれた状況によって、その意味は異なってくるので、これらの議論は別途必要である。そして、在日朝鮮人女性の不就学・非識字の歴史の掘り起こしの必要性がある。日本と在日の双方の社会において、在日朝鮮人女性の教育への言説を考察することも今後重要な作業だ。これらは今後の課題として、次にいかしたいと思う。